

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520036

研究課題名（和文） 理性的・社会的動物にかんするヒュームの観点からの研究

研究課題名（英文） Rational and Social Animals: A Humean Approach

## 研究代表者

伊勢 俊彦（ISE TOSHIHIKO）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：60201919

## 研究成果の概要（和文）：

理性と社会性という点で、人間はほかの動物と大きく違う。ヒュームは、人間と動物の心の働きの共通性に注目すると同時に、人間に特有の学問的探究や社会的活動を深く考察した。ヒュームの洞察を歴史的に意義づけると同時に現代に生かす試みをつうじて、人間の創造的活動の特徴が、不確実な目標の追求にあり、それが人間固有のあり方を形成すること。それと同時に、その根源が、動物と共通の、新たな行動パターンの獲得を可能にする認知活動にあるという見通しを得た。

## 研究成果の概要（英文）：

Humans are unique among animals in their rationality and sociability. David Hume observed that humans and other animals share the basic workings of mind, while humans pursue intellectual and social activities unlike other animals. Consideration of Hume's insight, in the light of historical as well as contemporary findings, suggests that human creativity is most clearly displayed in the pursuit of uncertain goals, and at the same time is rooted in the cognitive functions that give rise to new and adaptive behaviors in both humans and other animals.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

## 研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：ヒューム、動物論、理性、社会

## 1. 研究開始当初の背景

人間とほかの動物の共通性に注目することによって、人間の合理的、ならびに道徳的主体としてのあり方をとらえなおすマッキンタイアなどの試みから見て取れるのが、社会の中で相互に依存しあいながら生きる人間の自然本性に本質的に限界づけられたものとしての理性のあり方である。

本研究計画に至る研究で、このような理性のとらえ方が、ヒュームの哲学の中ですでに示されていることが確かめられた。また、現代の心理学や動物行動学の知見と照らしたときのヒュームの議論の重要性が示された。また、言語行為論との関係で、ヒュームにおける理性と自然本性の関係を社会的側面から考察する機会があった。

これらを通じて、人間が、一方で、集団生活する動物として本来的に共同的で相互に依存する存在であること、他方で、個人個人が自らの目的をもち、道具的な合理性を行使するということとの関係を解明するという課題が浮上した。

## 2. 研究の目的

(1) 社会行動と理性——集団行動する動物から合理的な個体の共同体へ

人間は、当面する行動の必要に応じるばかりでなく、現在の行動の文脈を離れた熟慮によってより長期的な目的を設定し、それを達成するための手段を選択するために理性を用いる。本研究では、このことを人間の社会的行動の特徴と関連づけて考察する。

状況からくる直接的必要に対処するための集団で行動する動物の個体が、おのおの別の目的を持ってその達成のために行動し、別々の目的追求を前提としながら他の個体と協力するようになる。このような過程が、ヒュームが描く人為的な合意による社会形成の理論が解明している対象であるという見通しから出発して、人間のもつ合理性と社会性の独自の特徴の起源を解明する。これが本研究の第一の課題である。

これを出発点として、言語や自己意識等、人間に特有と考えられる認知や行動の形態の考察に順次取り組む。

(2) 動物の心の哲学史におけるヒューム

動物の心と動物の人間の関係にかんするヒュームの議論の歴史的な位置づけを行なう。その際、一方では、モンテーニュ、デカルト、ロック、ベールらを含む近代哲学の大きな流れを視野に入れるとともに、ハチソン、マンドゥヴィル、リードら同時代の英国を中心とした哲学者の議論との関係に留意する。また、ダーウィン以降の進化論的観点から振り返って見たときの、これらの哲学者たちの見解や相互の対立の意味を検討する。これらをつうじて、ソラブジが古代哲学について行なったものと並ぶような研究を近代哲学についてまとめるための土台とする。

(3) 動物の心の現代的理論とヒューム

一方では「ヒトを含めた種々の動物の認知機能を分析し比較することにより、認知機能の系統発生を明らかにしようとする行動科学」(藤田和生)である比較認知科学をはじめ関連する諸科学の知見、他方では、シンガーの動物解放論等、動物の道徳的地位をめぐる議論の前提となっている哲学的了解との関係で、ヒュームに依拠する立場の意義と可能性を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が単独で、主として文献に依拠して行なう哲学的研究である。そ

の際のポイントは以下の通り。

(1) 理性と社会性との関係に注目しながら、ヒュームの著作の関連部分を精読すると同時に、ヒューム哲学の全体的枠組みの中に正確に位置づけることを最も基礎的な作業として行なう。

この点では、ヒュームが自らの探究について示している自己理解にとくに注目することによって、思考し行動する主体の側から見た哲学としてのヒューム哲学の特徴を明らかにした。

(2) 現代の哲学的諸理論を参照し、ヒュームの議論の現代的意義を明らかにする。

この点にかんしては、「ケアの倫理」で知られるネル・ノディングズが、ヒュームに高い評価を与えていることに注目し、ヒュームの道徳感情論がいかなる現代的意義を持ちうるかについて考察した。

また、ホイジンガらによる「遊び」の考察を参照することによって、人間に特有の知的・社会活動の、不確実な対象を追求する活動としての性格を明らかにした。

動物倫理関連の主題については、J. M. クツェーらの発言を参照しながら、「理性」の領域から人間以外の動物を排除する理性観に変わる理性観、また、動物を対象とする生命と身体の資源化が、人間自体の生命と身体の資源化につながる危険性、それに対抗する生命と理性の見方を、ヒュームから引き出す可能性を検討した。

(3) 比較認知科学等現代の科学的知見に照らした場合のヒュームの議論の意義の検討を進める。

人間と動物に共通する、環境の中で行動し、高度のパターンを変化させながら適応するという認知のあり方は、人間に固有の学問的探究や社会的活動の、不確実な目標の追求という性格と関連づけて考えられる。ヒュームによる哲学の自己理解と、人間と動物の共通性の強調も、この観点から結びつけて考えることができる。こうした考察からも、人間と動物の認知の比較の意義が確認できた。

(4) 同主題にかんする哲学史上の諸議論の体系的整理を進め、ヒュームの議論の歴史的な位置づけを計る。

「理性」や「言語」によって人間と他の動物を区別し、人間を優位に置くデカルトに代表される伝統にたいして、人間の他の動物を連続的にとらえ、人間の絶対的優位を否定する流れのうちに、ヒュームは古代のプラタルコス、近世のモンテーニュと並んで属する。これらの論者との対比では、ともすれば擬人観(したがって隠れた人間中心主義)に陥りがちな動物知性論において、人間中心でない観点からの理性論の可能性に留意して、ヒュームの議論の理解を試みた。

社会性の観点からの人間と他の動物の対

比にかかわっては、ヒュームが注目する社会関係の重層性（家族や朋友、市場における対等な個人、政治的な支配者と服従者）に注意し、「ヒューマナイゼーション」にかんする科学知見との関連も考察した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の主な成果

①「理性的動物・社会的動物」の哲学的解明  
ヒュームは、一面では、人間精神を、「実験的方法」によって客観的に解明することを標榜する。しかし、ヒューム自身が示している、自らの探究と探究者としての自己理解に注目すると、主体の側から見た、理性と社会性のあり方が現われてくる。こうした、主体の視点からのヒューム哲学の理解の可能性を示したことが、本研究の最も重要な成果である。

客観的視点からは、経験にもとづく因果推理とは、対象の恒常的相伴の経験によって決定づけられた精神の推移に他ならない。しかし、この必然的決定は、推理を現に行なっている主体の立場からはとらえられない。何を原因と見なし、何を結果とみなして仮説を立てるかというときに、主体が経験するのは、必然的な被決定ではなく、不確実性を伴った賭けの性格を持つ企てである。

同じ賭けの性格は、人間に特有の社会的活動にも見出すことができる。自他の所有の区別と、同意による物と労働の交換の規則に律せられる関係は、社会の成員の富を全体として増大させる機構である。しかし、この機構で不可欠の役割を果たす市場における取引は、個々の成員による利益の確保を保証せず、賭けの性格を帯びざるをえない。

人間の理性と社会性の双方に刻印された賭けの性格の根源は、人間とそれ以外の動物に共通する、認知と行動の関係にある。経験から得た一般的な認識を、行動の文脈から切り離して表現する手段を持たない動物にとって、経験から学ぶということは、行動のパターンを適応的に変化させることにほかならない。この、認知と行動の必然的な結びつきこそ、ヒュームが強調する人間と他の動物に共通の精神の働きの核心なのである。

##### ②ヒュームの動物論の歴史的位置

人間のことで語る能力が「理性」であるとするならば、人間以外の動物が理性を持たないということは、ほぼトートロジーにすぎない。他の動物に人間の言語を学ばせることができたとしても、それは強制的な同化でしかなく、その動物に固有の「理性」を認めることにはならないであろう。こうした認識は、カフカやクツェーラの文学作品に鋭く示されている。哲学の歴史においては、人間以外の動物が理性や言語を持たないというのは人間の先入見にすぎないという見解が、古代

においてはプルタルコス、近世においてはモンテーニュによって示されてきた。しかし、彼らの議論は、他の動物を人間に引きつけて考えるという点で、人間中心主義的な傾向を免れていないと思われる。ヒュームの動物理性論は、理性をあくまで行動の文脈でとらえる点で、人間中心の立場を前提せずに人間と他の動物に共通の理性のあり方を見て取る可能性を与えている。

社会的・集団的行動を示す人間以外の動物と人間の差異については、たとえばホブズが、人間以外の社会的動物（ハチやアリなど）においては、個体の利益と集団の利益が直接的に一致するのにたいし、人間においては個人の利益が対立し合うという見解を示している。ホブズが、個人個人のレベルと権力による支配の成立する国家社会のレベルにもつばら注目する。これにたいしてヒュームは、人間の社会的結合において、各人が相互に直接の配慮を持ち合う家族や朋友のレベル、強制なしに一定の規則にしたがう共同体のレベル、権力による支配の成立する政治社会のレベルを区別する。人間における社会的関係の特質を考えると、ヒューム的な視点からする関係の多層性への注目が重要である。こうしたことも、本研究の中で明らかになった。

##### ③現代の科学的研究から見た意義

人間と他の動物の認知を、行動との結びつきを中心に置くことによって共通の視点からとらえることで、哲学史上の諸議論が、人と動物の認知に関する現代的研究にたいして持つ意義や関連性をより明らかにすることにつながるであろう。また、人間どうしの社会的関係への多層性へのヒュームの洞察も、ヒトの進化における固有の特質の獲得（ヒューマナイゼーション）を考える上で意義が大きい。家族的単位と、より大きな群れとは、人間以外の動物にあっては共存せず、集団で生活する動物は、人間の場合のように異なったレベルの集団ごとに別々の規則によって行動することをしない。こうした、複数のレベルの集団的利益の追求という人間の特質を考察する上で、ヒュームの議論を参照する意義が明らかになったことも本研究の成果である。

##### (2) 国内外における位置づけとインパクト

①ヒュームの自己言及的な記述については、従来からある程度注目されていたところである。しかし、それを、ヒュームが解明した人間の理性や社会性の内容自体にかかわらせて理解する試みは、これまでなかったと思われる。ヒューム以外の哲学者についても、それぞれが提出している「理論」と、思考し行動する主体としての自己理解との関係という視点は、新たな解釈の可能性を開くと予想される。

②哲学の歴史上の動物論については、古代哲学に関するソラブジなどに比べて、近世哲学に関してまとまった見通しを示す業績がない。この点で、ヒュームの議論をホブズ等との対比で位置づけることは、近世哲学における動物論についてよりよい見通しを得るための視点を提供するのであろう。

③現代の科学的研究との関連では、ヒトが他の動物と異なり、「人間」固有の特質を獲得する「ヒューマナイゼーション」において問題となる、社会的な関係の重層的形成について、人間社会の構造そのものに内在的な参照枠を与える可能性が示された。

### (3) 今後の展望

①思考し行動する主体の観点からのヒューム哲学の解釈という展望が開かれたことで、その立場からのヒュームの哲学の全体像の洗い直しという課題が浮かび上がる。西洋近世においては、古代懐疑主義の再発見のインパクトが、人間理性の限界を見極めるという課題を提起した。これにたいし、現在のわれわれの社会は、産業文明のこれまでのあり方の見直しという課題に当面している。こうした状況の中で、上記の観点からのヒューム哲学の見直しを、哲学史的な興味にとどめず、われわれの時代の哲学のあり方にたいする示唆を得ることを目標に進めていくことが課題となる。

②社会性の観点からの人間と他の動物の関係の対比において、ヒュームに特徴的なのが、人間における社会関係の重層性への注目である。これは、ヒトの進化と、固有の特質の獲得の科学的研究と関連性を持つ。同時に、現代の倫理学における正義とケアの対比等、異なった社会関係や倫理的理念の考察を整理する上でも有効な視点を提供するのであろう。こうした観点から現代の理論的状況への寄与を模索することも課題となる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

### [雑誌論文] (計6件)

- ① 著者名：伊勢俊彦、論文タイトル：ヒュームの「自然」と哲学のあり方、雑誌名：アルケー、査読：無、巻：20、発行年：印刷中、2012
- ② 著者名：伊勢俊彦、論文タイトル：約束が与える行為の理由と人間の相互依存、雑誌名：立命館文学、査読：無、巻：625、発行年：2011、ページ：104-114
- ③ 著者名：伊勢俊彦、論文タイトル：動物たち(と)の自由な関係へ向けて—哲学史からの展望—、雑誌名：倫理学研究、査読：無、巻：41、発行年：2011、ページ：13-22
- ④ 著者名：伊勢俊彦、論文タイトル：社会的世

界における規則と偶然—ヒュームの探求と不確実なものへの賭け、雑誌名：哲学、査読：無、巻：62、発行年：2011、ページ：87-103

- ⑤ 著者名：Toshihiko ISE、論文タイトル：Hume's Animal and Situated Human Reason、雑誌名：Proceedings: the XXII World Congress of Philosophy、査読：有、巻：16、発行年：2010、ページ：141-147
- ⑥ 著者名：伊勢俊彦、論文タイトル：人間の動物的自然本性とそれに限界づけられた理性および社会性、雑誌名：唯物論と現代、査読：無、巻：43、発行年：2009、ページ：72-88

### [学会発表] (計5件)

- ① 発表者名：伊勢俊彦、発表タイトル：ヒューム(生誕300年記念)、学会名等：関西哲学学会第64回大会課題研究発表、発表年月日：2011年10月16日、発表場所：龍谷大学(京都府)
- ② 発表者名：伊勢俊彦、発表タイトル：ヒュームと現代、学会名等：日本哲学会第70回大会共同討議、発表年月日：2011年5月14日、発表場所：東京大学(東京都)
- ③ 発表者名：伊勢俊彦、発表タイトル：動物—倫理への問い、学会名等：関西倫理学会第63回大会シンポジウム、発表年月日：2010年11月7日、発表場所：南山大学(愛知県)
- ④ 発表者名：伊勢俊彦、発表タイトル：感情に基盤を置く倫理と遠い者、異質な者への配慮、学会名等：応用哲学会第2回年次大会一般発表、発表年月日：2010年4月25日、発表場所：北海道大学(北海道)
- ⑤ 発表者名：伊勢俊彦、発表タイトル：『人間本性論』における遊び・社交・闘争、学会名等：京都哲学史研究会、発表年月日：2009年6月27日、発表場所：京大 会館(京都府)

### [図書] (計0件)

### [産業財産権]

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

### [その他]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

伊勢 俊彦 (ISE TOSHIHIKO)  
立命館大学・文学部・教授  
研究者番号：60201919